

J.C.Oates の社会批判

—“The Hungry Ghosts”を中心に—

杉 田 豊 子

“The Hungry Ghosts”『飢えた亡霊たち』（1974）はJoyce Carol Oates（1938—）の約三十冊の著書の十九番目の作品として、“Crossing the Border”と前後して出版された。題名については扉に、「飢えた亡霊というのは佛教の餓鬼のことで、かれらは飢餓——つまり何らかの欲望——に駆られて地表をたえず彷徨している」という意味の言葉が記されている。この作品中の亡霊たちとは知識人、特にカナダ南部にある Hilberry という架空の大学に直接に関係のある人々をさし、かれらの諷刺、戯画化を通してカナダの大学を批判し、アメリカを批判している。

ジョイス・キャロル・オーツは二十五歳の時に、短編小説集“By the North Gate”『北門の傍で』（1963）を出版して以来、小説、詩、劇、文学評論の各分野にわたる活発な創作活動を続けており、その作品は量質ともに瞠目にあたいするものがある。デトロイト大学で五年間教えた後、故国を去ってカナダ、オンタリオ州のウインザー大学の英文学教授となり、最近ではプリンストン大学にも出講していると聞く。

アメリカ文学を明るさ、と暗さに分けるならば、オーツの場合は後者に属する。人間とは悲劇的なものである、という観点にたつてその悲劇的な運命に対処する姿勢をやしなうためには現実をありのままに書きまくるほかはない、という所信をもって創作に打ちこんでいるものと思われる。

It is my belief that the serious artist insists upon the sanctity of the world

— even the despairing artist insists upon the power of his art to somehow transform what is given. It may be that his role, his function, is to articulate the very worst, to force up into consciousness the most perverse and terrifying possibilities of the epoch, so that they can be dealt with and not simply feared; such artists are often denounced as vicious and disgusting when in fact they are — sometimes quite apart from their individual conceptions of themselves — in the service of their epoch, attempting to locate images adequate to the unshaped, unconscious horrors they sense. (1)

二十世紀のアメリカ文壇が、南部文学、ユダヤ系文学、黒人文学等のジャンルに加えてさまざまな反リアリズムの実験的作家群の台頭でにぎわっている時、オーツがその深い学識をもって伝統的な写実主義の道を着実に歩いているのは立派であるといわねばならない。

オーツ自身の環境の変化に伴うかのように、作品の舞台も田園地方から大都会を経てカナダへと移行している。“By the North Gate”をはじめ、“With Shuddering Fall” (1964) “A Garden of Earthly Delights” (1967) 等の初期の作品は田舎を背景に、そこに住む老若男女の情念の葛藤、無気力、孤独感、自己喪失などを繊細、流麗な筆でえがいている。かれらの周囲の自然は、人間を暖かく包む自然ではなく、人間を脅やかす暴風雨、大雪、洪水の類である。自分の内面からくる心理的圧迫と、自然の暴力とにはさみ打ちされた人間が、衝動的に捌け口を求めて、傷害、殺人、自殺、強姦、裏切りといった事件をひき起す。舞台が Detroit のような大都会になると人間に対する社会的心理的圧迫は一層深刻になる。底辺にうごめく人々は日々のパンを得るために仲間から孤立するばかりか争うようになる。目に見えぬ恐怖は絶望感につながり、自己喪失、集団性の喪失に達する。公害汚染にまみれた大都市は、生きがためには逃れるわけにはゆかない牢獄であり、機械文明のもたらす悲劇的なホロコーストである。デトロイトの poor whites の生活を

画いた“them”(1969)は全米図書賞を与えられたが、その出版に先だ
ってオーツは故国を去り、カナダに転住した。

オーツの社会批判は大都市ばかりではない。象牙の塔——大学という
アカデミックな世界も社会の縮図であり、これまで彼女が経験してきた
環境と同じく、暴力に満ちたものであった。流血の惨事こそなければ、嫉
妬、策謀、差別に満ちた人間関係の破壊ともいべき雰囲気は、オーツ
が他の作品で画いたものと似たりよったりの精神的暴力の世界であった。

“The Hungry Ghost”の第一話、“American Democracy”の主人
公 Ronald Pauli は大学教師に就任して二年目であるが、苦心して書き
あげた論文『Tocqueville と Grattan の作品に関する二十世紀の批評の
概説』をコピーエディターの Dietrich に渡したところ、コピーのできあ
がらぬうちに D が急死してしまう。現在の自分にとっては命から二番目
に大切な原稿を取り戻すために Ronald は D の住んでいたという地下室
のアパートに行くが、足を踏み入れる場所もない異常な乱雑さに驚く。
刺激性のあるさまざまな悪臭が密閉された室内にたちこめ、Ronald は
嘔吐をもよおす。D が自然死して六日間放置されていたベッドをみても
鬼気迫る感をおぼえる心の余裕もなく、Ronald は夢中で原稿をさがしは
じめる。——あなたの原稿はかならずありますよ。あの人がなにも焼き
捨てた形跡はないんですから——というアパートの女主人の言葉をたよ
りに、ベッドの下からトイレの中まで這いつくばってさがし求める。ベ
トベトに汚れた衣類やタオル、シーツの山が至るところにあり、部屋一
面に紙屑や書類が散らばっている。印刷されただれかの書類を手にと
ると、食物のこびりついた皿が沢山あらわれ、ごきぶりが走りまわって
いる。やがて一枚二枚とあらわれた彼の原稿は——何度もタイプを打ち直
したものであったのに——皺だらけになったり、汚物がついていたり、
破れていたり、不完全な形ではあったが何百枚か回収できた。講義の準
備もあり、一時間ですませるつもりが、まる一日かかった狂気じみた捜

素、そしてもう使いものにならない原稿——Ronald は発作的にすすりな
いた。題名が暗示しているように、このストーリーはアメリカの民主主
義を批判している。悪臭のこもった密室は混乱、腐敗したアメリカ社会
の姿であり、形ばかり残って用をなさない、きれぎれの論文はアメリカ
の民主主義を象徴しているのであろう。デトロイト在住後、アメリカに
見切りをつけた如くにカナダに転住したオーツの、愛する故国に対する
ささやかな警鐘と考えられないであろうか。

Although the settings seem to change, the place names differ, the
geographical locales are different, they are all the same. They are the
“Unreal City” of the Wasteland which is nowhere and everywhere. They
are Detroit, Chicago, Cedar Grove, Fernwood; they are north and south,
large and small, urban and rural — but they are all the same. They are the
savage jungle, the urban wilderness where the only rule of life is dog-eat-
dog. There are no victors, there are only those who are not quite so badly
hurt. (2)

The city is not the only target of Oates’s criticism of society. She is very
much at home with an academic setting She is no more partial
to the academic world than to any other familiar setting; the chilling in-
humanity of academia she describes is not unlike the vivid accounts of
unkindness and destructive relationships found elsewhere in her works. (3)

“Up from Slavery” 『奴隷より身を起こして』は親しまれた言葉を
借用した皮肉な題名である。Franklin Ambroseは十年前にアメリカを
風靡した‘Black is Beautiful’ という標語を地でいったような美男子の黒
人教授で、うすい口ひげに真黒で野蛮といえるほどいかついヤギひげを
たくわえ、ピカピカの靴、ピエール・カルダン風の派手なシャツ、絹のあや
織の高価なネクタイ、流行仕立ての背広に身を固めている。快活で精力
的で誇り高い彼には、白人の妻と、幸いにも肌の白い美しい双生児の男

の子がいる。学生数五千の小さな Hilberry に職を求めたのは、黒人が少ないだろうと思ったからだ。彼のほかに黒人の教授が心理学部にいて、アフロスタイルの髪をしていた。「あの人はブラックを看板にしているのさ」Frank はこんな批評をして学生達を笑わせた。彼は Hilberry 大学の English Department では、ただ一人の黒人であり、ただ一人の Harvard 出身者で、フルブライト・フェローとして英国に一年間留学もしていた。そんな彼が、たちまち English Department で最も人気のある教授になったのも当然であった。同僚たちが学生との個人的な接触をさけている時、彼は学生達の集まるパブへ出かけ、かれらと共に楽しみ、語りあった。紳士的な彼は、同僚の噂を学生達にする時はこの上なく慎重だった。世代のギャップをうめてくれる人として教授間の評判もよかった。ところが六十年代の後半に “The Student as Nigger” というエッセイが広く読まれ、学生新聞にも載せられると、“nigger” という言葉が Frank の面前でも学生達の口をついてできるようになり、彼の神経は尖った。パーティで、ほろ酔いきげんの教授夫人の侮辱的な一言に彼は怒髪天を突く思いをする。以後、深酔いする毎に、「白い肌をした自分のこども達がさらわれる」という被害妄想さえ抱くようになった。

The word “nigger”! On everyone’s lips! Frank was furious, demoralized, befuddled; he would not explain his moods to his wife; he went out one evening by himself to a cocktail lounge far from the University, where he got drunk and had to be sent home in a taxi-cab. At such times, when he was very drunk, he had the confused idea that some white man – any white man at all – was trying to appropriate his twin boys. “They want to take my babies away, my babies,” he would weep. “They want to take my babies because I’m black and my babies are white”

He knew he was not a “nigger” and yet he wasn’t sure that other people, glancing at him, knew. He recalled with horror the evening, at a faculty

party, when the slightly drunken wife of a colleague had cornered him to ask whether he planned “to go back to the ghetto to help his people,” seeing that he himself was so successful. That white bitch! How he had hated her! (4)

Frank は Appointments and Promotion Committee (俗称 Hiring and Firing Committee) という教員の任免、昇格を担当する有力な委員会の最年少のメンバーであった。1969年の春、講師の公募に応じてきた数人の志願者のうち、シカゴ大学からの推薦状をもった若く聡明な、当世風の Molly Holt に関心をもち、長時間にわたって委員会を説得して彼女の採用に踏みきらせてしまう。Molly は離婚歴のある、三歳の子づれの教師であるが、Frank は彼女と昼食を共にしたり、雨の日は車で送ってやったりしてつきまとい、学生達の行くバブヘさそうだが、彼女は家庭のことや講義の準備を大切に考えて応じない。やがて機会があって、彼女が仕事の話や、前夫とのゴタゴタ話に触れると、Frank は立ち入った質問をする。Molly は大学内での女性に対する差別に言及し、「あなたは黒人だから白人男性の体制に、泥みたいな取り扱いを受けたことがあるでしょう？ あなた、だまされてひどいめにあったことがあるでしょう？ 黒人も女性も同じことよ」と言ってしまう。

“Thank you, but I’m not a self-pitying woman. Thank you anyway,” she said, drawing back from him. “But you know what it’s like.”

“What it’s like — ?”

“To be discriminated against.”

Frank stared at her.

“What’s wrong?” she said.

Frank began to stammer. “Just what — what did you mean by that statement — Would you kindly explain that statement?”

What statement? ”

“That I – I’m supposed to know – Supposed to know what it’s like to be discriminated against –”

“Well, don’t you?” Molly asked. “Being a black, you’ve been treated like dirt by the white male Establishment – haven’t you? Haven’t they victimized you? Blacks and women are both –”

Frank could not believe his ears. He grabbed her arm. (5)

二人は喧嘩別れになり、胸の奥にある古傷を突かれた Frank は怒りの炎に燃え続けて数日間は別人のようであった。愛する女性から受けた侮辱であるだけに打撃は大きく、相手に致命的な仇討ちをしてやろうと考える。地味な服装をして部主任に会い静かな声で簡潔に Appointments and Promotion Committee (人事委員会) の緊急召集を要請する。

Miss Holt が学生達から尊敬の念を払われていないことから始めて、自分が学生団体と密接な関係にあることをほのめかせながら、彼女について、あることないことをまことしやかにごん訴する。温厚な主任 Dr. Barth は、「でも Miss Holt はシカゴ大学から Ph.D を受けることになっているのですよ」というが、「いいえ、彼女の研究はこの一年で少しも進んでいません」と否定する。委員会は彼女の解雇に同意した。翌週の English Department は Miss Holt を加えた会議の席上、予算の都合で彼女の契約を更新することが不可能であると宣言した。Molly Holt は突然の解雇に驚きながら自己弁護の機会も与えられずに去ってゆく。

Frank はこの復讐には勝ったものの、やり場のない憂うつ感に閉ざされる。He sensed his totality, his completion – a man who did not need anyone else, certainly not a woman. Not that white bitch. Not any white vitch at all. But he had lived through a certain draining emotional experience – and though he had triumphed as he had known he would, still he felt a little melancholy. It was a delicate, sensitive, almost poetic melancholy, and his twin boys were so healthy and noisy that they might destroy it. (7)

この物語は、自信たっぷりの誇り高い黒人教師が心の奥底にもつ complex を浮き彫りにし、同時に、まじめで学究心の強い無力な女性教師が、グループの力を利用した男性の迫害によって、あっさりと葬られてゆく姿をえがいている。一見、民主的な形をとりながら実は個人の強引な意志に牛耳られている委員会を通して、大学の封建臭が感じられる。

邪魔ものを追い出すために集団の力を利用しようとして失敗した例は“*A Descriptive Catalogue*”にみられる。Ron Blass は作詩の講座を担当する詩人で、多くの詩集を出版し、業績の点でも English Department ではぬきんでていた。彼は修士であったが顕著な創作能力と彼の講座を受講する学生数の多いことで准教授に任ぜられ、同年に就職した Reynold Mason 達より契約期間を延長されていた。Mason は博士であったが業績がその後皆無であるため、契約ぎれの不安があった。嫉妬と焦燥で、彼は Ron に対して常軌を逸した態度をとるようになり、二か月もデータを集めた後、定例の教授会の席上で、Ron の詩が剽窃であると言明して、弾劾委員会を開くべきだと提唱した。いくつかの Ron の詩について長時間論議されるが、「多分こうだろう」というだけでは剽窃とはいえず、無意識ということもあるという点で終る。Ron は突然、わが身におぼえのない言葉を浴びせられて、気も動転し、発言する元気もなくなって罪人のような態度をしている。再度委員会が開かれ、Ron を解雇するか否かについて投票が行なわれた。賛成者は一名しかなく、Ron は大学にとどまり、Mason は自分から種をまいた暴力の結果を刈りとらねばならなかった。彼は強がりの捨て台詞を叫んで Hilberry を去り、やがて忘れられてしまったのである。

“*The Birth of Tragedy*” は卒業期を前にしたミシガン大学の学生達の深刻な就職難を反映する会話ではじまる。Dylan Thomas の詩について卒業論文を書いた Barry は教師になりたい、詩を教えたいと念願する真面目で内気な青年である。応募した Hilberry College の助手の職

が決まるまで、幾晩も眠れぬ苦悩を経験する。ミシガン大学とは比較にならぬ小さなキャンパス、平凡な建物、大学院の物柔らかな、活気の無い中年の教授陣に少々失望しながらも大学院の所属になれたことを Barry は心から喜んだ。Oxford で学位を得たという Thayer 教授に抜擢されてその Shakespeare の講義の助手をつとめることになり、大きな lecture hall で学生の出席をとり、テストの採点をし、時には教授の代講をさせるかもしれない、といい渡された。講義には必ず出席し、どの学生がノートをとっているかを調べ、スパイの侵入には気をつけよ、と命ぜられる。Barry の採点した答案は T 教授が綿密に点検し、スペリングのあやまりに至るまで減点しなおした。彼には、見えない敵に対して絶えず警戒する、近寄り難い恐しさがあったが、Barry は恩を感じているので、彼に対する忠実な態度をくずさなかった。七、八年前、トロントの学会で、あるルネッサンス学者が Sturgess について発表をしていた際、T 教授が乱れた泥酔姿であられ、挑戦的に罵ったことが地方新聞に載ったとか、彼は演劇部の学生に偏見をもち、やたらに彼のクラスから追い出すとか、数年前、彼は演劇部に加わって自ら Iago の役を見事に演じていたのに、ある晩、なにが疳に触れたのか、開幕寸前に姿を消し、総長の勧告にも応じなかったとか、T 教授の異常な行動については数多い噂があったが、Barry は大して気にも留めなかった。ある日、T 教授は Barry を研究室に呼び、近日中に君のキャリアにおける画期的な機会を与えてやろう、Shakespeare の代講をさせるから次週月曜に自宅へコーチを受けにくるように、とつたえた。

T 教授の住居はナイアガラに通じる騒々しいハイウェイに添った、キッチン付きのモートルであった。緊張した面持ちで参上した Barry を前に教授は講義の内容には、みじんも触れず、自ら作ったという料理の話、酒の話、同僚の中傷、罵倒、大学に対する個人的な不慢などを際限もなく吐露するのだった。酔いに乗った執拗な饒舌の重苦しさと明朝の代講

への不安に耐えられず、Barryはノートを抱えて逃げ出す。自分の手下に加えようとした新入の青年が、思いどおりにならないと知ったT教授は、半狂乱になって立腹し、罵詈雑言を浴びせかける。

“Dr. Thayer, no, I – I came here for – to learn to – to be a teacher – to get in the Ph.D. program and – and –”

“What Ph.D. program, you little idiot?” Thayer laughed.

“We’re dropping it after this year – the province of Ontario is shutting us down – it was all a ruse, my boy, we need students and you show up, perfectly idiotic little boys and girls who can’t spell, who know no Latin and less Greek, many of you from the States – Go back! Leave! Get out of here! Out of my mortel room! Out, out! Leave!” (7)

Barryは徹夜でノートを補充し、翌日は睡眠不足で体調も悪かったが夢中で初舞台にのぼると、学生の発言をまじえながら、悲劇について、Hamletについて、彼なりの信念を語った。教壇を降りると最後部の席からT教授がテープレコーダーを抱えて、陰険な笑いを浮かべながら立ち上った。Barryは彼の方には目もくれなかった。——こんなところはごめんだ。米国へ帰って厚生部に頼もう。学位など、もう問題外だ——彼は自分に言ってきかせた。このストーリーは、Thayer教授のような異常な人物が、既得の僅かな学識のかけに、狂気じみた要素を隠して棲息している様を示している。希望に燃えた若者を、代講を餌に自分の身方に引きいれようとし、失敗した場合には即刻、追放して、その将来を葬ってしまう身勝手がまかり通るアカデミアの不条理にスポットライトが当てられている。

カナダの小さな架空の大学をSettingとして、オーツはそこに見出された暴力の実態を精密に読者の眼前に画いてみせている。彼女は解決のヒントを与えたりしない。常に実態を示し、そういう実態を直視しなければならないことを感じさせるのである。

One of Joyce Carol Oates's persistent concern is to make the tragic vision real to the twentieth century. She seeks through her works to awaken contemporary society to its own destruction, to deepen the consciousness of her readers to the tragic dimensions of life. (8)

Notes

- (1) Oates, J. C. *New Heaven, New Earth*, The Vanguard Press, Inc. N. Y. 1972, p. 7.
- (2) Grant, Mary Kathryn, R.S.M.: *The Tragic Vision of Joyce Carol Oates*, Duke University Press, Durham, N.C. 1978, p. 19.
- (3) *Ibid.*, p. 20.
- (4) Oates, J. C.: *The Hungry Ghosts*, Black Sparrow Press, Los Angeles, 1975, p. 66.
- (5) *Ibid.*, p. 71.
- (6) *Ibid.*, p. 76.
- (7) *Ibid.*, p. 122.
- (8) Grant, Mary Kathryn, R.S.M.: *The Tragic Vision of Joyce Carol Oates*, Duke Univ. Press, Durham, N.C.: 1978, p. 117.